

コンクール嫌いになった理由

ヨーロッパのオーケストラで何としても振りたくなつた僕は、コンクールを受けてみることにした。

もともと僕は、コンクールやオーディションなど、人が長い間してきたことに、短い時間で可否を出したり順位をつけたりするようなことが嫌いであつた。そこに秘めた演奏者の愛情や労苦をまるで無視し、結果だけが重要だとも言うかのようなことは、特に音楽の分野では、まるで意味がないとしか思えないからだ。

音楽は、野球の試合でホームランが出て、一瞬にして一点が入るといふような世界ではない。音楽が好きかどうか、音楽を愛しているかどうかが一番大切なのに、そういうことをほとんど無視するような行為が、コンクールやオーディションの類だからだ。

大学生のとき、京都のある女子高校で、吹奏楽部の講師のアルバイトをしたことがあつた。この吹奏楽部のレパートリーは『サザエさん』とか『ドラえもん』のテーマソングで、あとは流行の歌謡曲ぐらいしかなかつた。

部員も中学生と高校生が一緒に、言ってみればお遊び的なサークルである。活躍する場も、せいぜい学園祭ぐらいで、あとは放課後、ちまちまと集まって練習する程度だつた。

そんな吹奏楽部だったから、初めのうちは僕も適当に活動に参加していたのだが、彼女たちはヘタなせいとか、練習中はしんみりとして、やけにおとなしい。ところが、終わったとたん、これが同じ人間かと思えるほどパワフルなエネルギーを発揮して元気になる。

そのパワーを見て、ふと「鍛えたら素晴らしい吹奏楽部になるかもしれない」と思いつき、コンクールに出場させることに決めた。

それからというもの、「朝練」を始め、夏休みには合宿をした。合宿は、日射病にかかつてしまう子が出るくらい、かなり厳しい練習だつた。僕と同じ大学の友だち何人かに声を掛け、各パートについてもらつて徹底的に技術を磨くなど、考えられる限りの特訓を続けた。彼女たちも、日々上達することに喜びを感じてくれたのか、必死でついてきてくれた。

その甲斐があつて、それまで出たことがないひとランク上のコンクールに出場し、銀賞を取ることができたのである。その女子高にとってみれば、創立以来の快挙であ

った。

僕は、「こいつらはもつと上まで行ける」と確信し、さらにレベルの高いコンクールを目指すことにした。そこで金賞を取ると関西大会に出場し、さらに全国大会まで道が開けるといふ大きなコンクールである。僕は、少なくとも関西大会までは連れて行くかと思っていたし、それは絶対に可能だと確信していた。

曲目も、彼女たちが「そんな曲あるんですか？」と言ってくるの、全国大会で超一流の演奏団体が取り上げるような、彼女たちには少々不釣り合いとも思える曲を選び、それから半年というものの、特訓に特訓を重ねていった。

そして、いよいよ迎えた当日、素晴らしい演奏を彼女たちは披露した。終わった瞬間、場内からは拍手ではなく、「ウォオオオ」というもの凄く大きなどよめきが起こった。それもそのはずである。これまで名前すら聞いたこともないような女子高が、楽器の構える角度をピシッと決めて、難しい曲を完璧に演奏してのけたのだから。関西大会で連続優勝している名門天理高校の部長を務めていた僕の先輩も、「全国でも通用する」と大鼓判を押してくれ、僕もそれを信じていた。

ところが、結果は意外にも何十団体の中でも最下位の銅賞だった。

審査員から、「これはコンクールです。ですから、まともっている団体、きっちり

演奏した団体、大きな音よりきれいな音を出した団体が評価されます」との話があった。審査員といっても、肩書ばかりがいろいろついている教育関係者がほとんどで、音楽に関してはまったくの門外漢と言っている。

しかし、教育という点から見たとしても、それまでほとんど技術のなかった彼女たちが、どれだけの努力をしてここまでたどり着いたのかということの評価するのが本当ではないか。

審査結果に不満だった僕は、表彰式が終るや否や、審査員の控室に納得のいく説明をしてもらいにすつ飛んで行った。しかし、審査員は「君たちのような演奏は文化祭では受けるかもしれないけれど、コンクールではダメだ」とか、「採点表なんか零点になってますよ」と言うのである。

僕は、音楽に対する彼らのあまりの意識の低さにカーツとなり、審査員の顔めがけ、カバンを投げつけてしまった。控室の中は大混乱状態である。

このときのコンクールの審査員たちだけが、たまたまこうした考えを持っていたのではない。日本のクラシックの世界には、そうした審査員や批評家たちが数限りなくいるのだ。僕にとってはたまたまなく退屈なものに対して百点を与える人たちがばかりなのである。

このとき問題を起こしてしまつたために、結局その女子高の講師を辞めることになつたが、いまだにコンクール嫌いなのは、このときの経験が強烈に残っているからである。

招待状が届いたのは「ブザンソン」だけ

コンクールを受けようと思つたのは、佐野さんの後押しもあつたからだつた。僕は、ウィーンから毎日のように日本にいる佐野さんに電話をしては、「振りたい、振りたい、オーケストラを振りたいねん」と言つていた。そして佐野さんは、「いつぺん片っ端から応募して、その思いを思い切りぶつけてみたらええやん」と、コンクールに応募することを勧めてくれたのである。

佐野さんもコンクールが嫌いだった。にもかかわらず、そう言つてくれたのは、振るのがたとえコンクールのような場であっても、僕の中にある「音楽をしたい」という情熱をいい方向で開花させ、また爆発させることができると思つたからだという。コンクールを受ければ、少なくとも一回はオーケストラを前に指揮できる。燕尾服えんびふくも着られる。しかも、運良く一次試験にパスすれば、二次試験でも振ることができる

のだ。そう思つたら居ても立ってもいられなくなり、その年に行われるありとあらゆるコンクールに応募した。

全部で八カ所ぐらい応募しただろうか、しかし、出せども出せども、どこからも招待状は来なかつた。すべて書類選考で落とされたのである。

指揮者のコンクールを受けるには、普通推薦状が必要で、推薦状があつて初めて出場が検討されることになっている。他にもそれまでの経歴がチェックされるなど、書類選考とはいえ、かなり厳しい。

というのも、前にも述べたように、三十分ぐらい指揮のレッスンを受けただけでも「私は指揮者です」と公言さずすれば、誰でも指揮者を名のれる世界だからである。極端に言えば、指揮者コンクールでは、書類選考が最大の難関なのだ。

そんなことは百も承知だつたが、僕はあえてバーンスタインの推薦状と一緒に送らなかつた。彼に推薦状を書いてもらうどころか、コンクールを受けるといふ相談すらしなかつた。

相談しても、もしかしたら反対されるかもしれない。反対されたら、コンクールを受けることはできない。オーケストラを振るチャンスもなくなつてしまうからだ。

タンゲルウッドに選ばれたという経歴しかない僕が、著名な指揮者や音楽家の推薦